Action1

緑と木が生み出す、人にやさしい働き方

１日の３分の１もの時間を過ごし、時に強いストレスにさらされ、ややもすると無機質なものに囲まれがちなオフィス。日本人は、そのような環境で長年働き続けてきました。そして近年、働き方改革が注目されフリーアドレス化など様々な取組が浸透し始めた矢先、新型コロナウイルスの大流行により、私達は働き方や生活の大転換を余儀なくされ、多くの人々は、毎日通っていたオフィスから離れてテレワークなどに取り組むことになりました。

その中で、オフィスに求められる要素や、リモートワークの課題などが改めて見えるようになってきたのではないでしょうか。メールでは物足りず、同僚と直接会って議論をしたいと感じた方もいたかと思います。オフィスは、同じものを見ながら、諸々について各々が感じ、考えたことを、視線で、肉声で伝え合い、新しい発見や連帯感など目に見えない価値を生み出す空間ではないでしょうか。せっかく共有する場所なら、働く人々と空間が相互作用するような、そんなオフィスがいい、せっかく芽生えた働く人にやさしいオフィス作りの流れを止めるのももったいない、そう思うのです。

一方、リモートワークの浸透により、「私」の空間である自宅で仕事をすることの課題も見えるようになってきました。本来くつろぐはずの場所が職場になることで、オンとオフの切り替えがうまくいかず、ストレスを感じる人もいます。

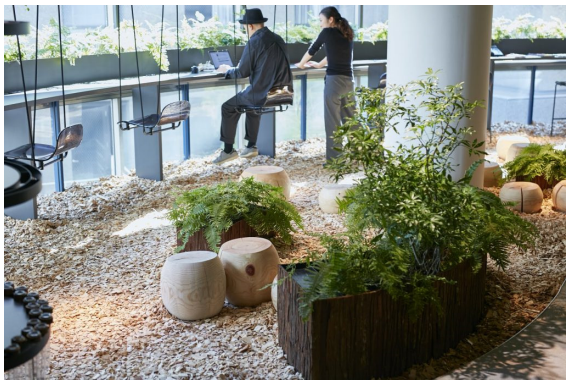
人は森からやってきた生き物だと言われています。歳月をかけて大地から育つ木と、光合成を行う緑から、人はさまざまなものを感じます。力強さ、生命力、創造性、包容力・・。それはあなたのDNAに緑や木が働きかけているからかもしれません。あなたの働く空間でも、その力を感じてみませんか。

株式会社パーク・コーポレーション　parkERs（パーカーズ）

「未来の公園」の中で働く

写真は2019年に竣工した、「日常に公園のここちよさを。」をコンセプトに空間デザイン事業を手がけるparkERs（パーカーズ）のオフィス。

足を踏み入れた瞬間から木と植物の香りに包まれます。スギやヒノキの丸太から造り出した椅子に腰掛けると、自然と年輪を数えて木の生涯に思いを馳せたり、チップを踏みしめる感触を楽しんだり。中央の大きなテーブルはトチの無垢材。生き物の住処等の痕もそのままで打合せの会話にも登場します。



スギとヒノキの腰掛け、スギの樹皮を活かしたプランター、敷き詰められたチップ。奥にはブランコが揺れる。

テーブルに残る生物の痕跡。

自然の形状を活かした4枚のトチで作られたテーブル。

このオフィスで使われている樹皮や枝、ウッドチップは、実は普通は捨てられるもの。「１本の木を使い切ることで新しい森林の価値観を提供したい」という東京都檜原村の東京チェンソーズとparkERsの自然への思いが重なり、オフィスの中に森ができています。

目指したのは「安心して衝突できる場所」（ブランドマネジャーの梅澤伸也さん）。オフィスの植物は日々成長し、花が咲いたり枯れたり変化が生じます。それらは人間の心の波風を受け止めたり、逆に人間に影響を与えたり、ここでは緑と木に囲まれて、均一ではない時間が流れます。出勤して疲弊して帰宅するのではなく、植物のパワーをもらって帰っていく、ここはそんなオフィスかもしれません。

三菱地所レジデンス株式会社・三菱地所ホーム株式会社

ママ、お仕事行ってくるね

2020年〇月×日午前7時30分の首都圏のある家庭。長女を小学校へと送り出し、出勤日のパパは下の男の子と保育園へ行く準備。靴を履きながら、ウルトラマンについて議論しています。朝食の片付けを終えて洗濯物を干したママは、玄関で息子をぎゅっとして、「ママ、お仕事行ってくるね。」と声をかけます。5歳の息子は、ママはお仕事か、と何となく納得しながらパパと出発しました。

家族がゆるやかに繋がる。可動式テーブル付き。

箱の中には作業スペースと棚があり、自分だけの空間がつくれる。

ママの向かった先は駅、ではなくリビングの一角にあるスギの木の箱の中!? ここは、家の中にあるパパとママのお仕事スペースで、ママはテレワークの日です。一歩入ると、気持ちのスイッチが入って仕事モードに。途中、オンラインでミーティングが始まりましたが、子供達が散らかしたままのリビングは映りません。夕方、テレワークを終えて、長女の学童保育と息子の保育園のお迎えに。お休みの日は子どもたちのスペースにも変身。家の中に新しい「居場所」をつくることができそうです。

三菱地所グループでは、2019年に山梨県産のスギを使った「箱の間」を発売しました。スギの柔らかさと箱の直線が家庭と仕事をゆるやかに隔てています。スギに囲まれた仕事スペース、欲しいですね・・。

株式会社良品計画

「完成させないオフィス」と木の物語

2015年、良品計画のオフィスリノベーションプロジェクトが始動しました。20年近く使用していたオフィスは、長年の使用による汚れや統一感のないデスクなどが蓄積し、雑然とした空間となっていました。アンケートや議論を通じて社員にとっての働きやすさを求め、リノベーションが進められた結果、要望の大きかった打合せスペースや収納などを確保し、シンプルかつ機能的なオフィスに生まれ変わりました。

打合せテーブルは元々はスギの端材（丸太から大きい板をとった後の残り）で、チップにされたり捨てられたりしていましたが、デザインにより価値を与えられ、都会のオフィスの中で家具として生き続けることになりました。

スギは比較的柔らかい木材で、使っていれば無傷とはいきません。しかし、リノベーション後も働きやすさを考え続ける、「完成させないオフィス」という良品計画の風土の中で、スギの家具は手入れをされ、育まれています。

オフィス内のデスク天板はスギの端材を利用した中空パネル。

アムニモ株式会社

創造性には本物を

数カ所に分散したオフィス。マネージャーが窓際に座って、その前に机が川の字に並んだ画一的配置。新しいものを迅速に生み出すことを求められる部署の職場がそんな環境で良いのか。これが、IoTを提供するアムニモ株式会社社長の谷口功一さんがオフィスの改装をしようと考えた発端でした。一箇所に集約して生まれ変わったオフィスには、フリーアドレス制、ガラス張りの会議室などとともに、多くの木製什器・家具が導入されました。

節のあるサクラ材が、くつろぎの空間を演出。

木の種類はスギ、ナラ、ブナ、チーク、ウォールナットなど。柔らかいスギには特殊な加工がされており、堅いけれどしっとりとした触り心地です。ブナやナラは白く優しく、ウォールナットは黒っぽい色と相まって力強い印象を与えます。谷口さん曰く、「手触りも発想の重要なビタミン」とのこと。木の効果だけではないかもしれませんが、職場内のコミュニケーションが向上し、笑顔や挨拶、あちこちで議論する風景が増えました。

「偽物に囲まれていい発想ができるわけがない。」とは谷口さんの言です。オフィス内には、デザイン性の高い時計や、テレビ会議も、画面に書いたものを世界のどこでも同時に共有もできるモニター、木のテーブル‥と「本物」の触媒が散りばめられています。コロナ禍の影響で、現在はリモートワークが中心になっていますが、オフィスもきちんとメンテナンスして、また集える日が来ることを願っています。

特殊加工されたスギのデスク。

（写真提供：株式会社オカムラ）

オフィスキャンプ東吉野

たまには自然の中で

大阪市内から車で約1時間半、およそ500年前から林業が行われてきた、吉野林業で有名な奈良県の東吉野村に、オフィスキャンプ東吉野はあります。

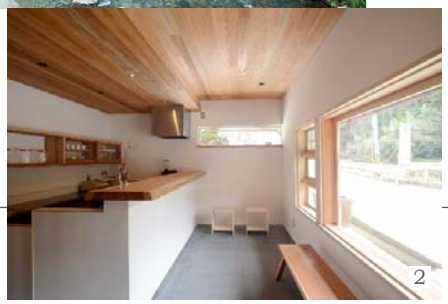
オフィスキャンプ東吉野の代表の坂本大祐さんは、中学時代の山村留学が縁となり、東吉野村に移住しました。それから数年後、坂本さんが村の中心近くの一軒の家の前を通りかかると、家主が荷物を運び出していました。築70年の立派な家で、何をしているのかと尋ねると、もう住まなくなるし、家が荒れると近隣に迷惑がかかるため、取り壊すとのこと。そこから、坂本さんと行政の連携や家主の賛同を得て、古民家はリノベーションされて、2015年4月にシェアオフィスとしてオープンしました。

リノベーションに使われた木材は、全て吉野産。垂直方向にはヒノキを、水平方向にはスギを用い、地元の大工さんが施工しました。入口を入ったところにある立派な一枚板も、吉野産のケヤキです。

オフィスにはWi-Fi環境やプリンター複合機、コーヒースタンドもあります。通常業務を自然の中でするのもよし、ワークショップを開催するのもよし、近隣に宿泊して泊まりがけで合宿するのもよし、使い方は人それぞれです。5年前のオープン以来、7,000人（2020年現在）の訪問があったそうです。ちなみに、東吉野村の人口は、平成27年時点で約1,700人。

オフィスのコンセプトは、「遊ぶように働く」山村のシェアオフィス。せっかくの清流を目の前にして、都心のオフィスと全く同じ働き方はもったいない。そして、もう少し働くと遊ぶが混ざってもよいのではないか、という坂本さんの思い。

500年間人の手が入り続けてきた吉野の山は、神社の境内のような神聖さがあるといいます。静けさと山の空気、青く見えるほどの透き通った流れ、人によって形にされていない価値、言語化されていない価値に触れる、そんなことが可能なのも山村のシェアオフィスの魅力です。



1．オフィスキャンプ東吉野の前を流れる高見川。清流は吉野川に合流し、最後は紀の川となって海へと至ります。
2．オフィス内のコーヒースタンド。カウンターはスギの一枚板。清々しい空間で香り高いコーヒーをどうぞ。